



焼津市の通級指導教室(ことばの教室・まなびの教室)の担当者として、多くの子ども達を支援してこられた荒井久美子先生に、特別支援教育で大切にしたいことや、一人一人の特性に応じた支援のヒントについて、わかりやすい言葉で書いていただきました。

その子に合った伝え方とは？

年度末の人事により、勤務先がかわった時のことです。つい、それまでの習慣で、本来進むべき道を曲がってしまったり、通り過ぎてしまったりした経験はありませんか。私は、異動後の通勤ではたまにやってしまいました。習慣というか、くせというか、惰性というか…。

まなびの教室での指導において、似たような場面に遭遇しました。この時は、子どもが、教師の指示通りに行動できなかつたのです。「教師の指示通りに行動できなかつた」と聞くと子どもに非があるように聞こえますが、実はそうばかりではなかつたのです。



Aさんは、集中力にかける、不注意があるなどの特性をもっているお子さんでした。

指導の中で、2枚のプリントに取り組みました。

1枚目の1問目は、練習ということで、教師と一緒にいき、1枚目の残りの3問は、1問ずつ解いては丸付けを行い、2枚目の2問も、1問ずつ解いては丸付けを行いました。

そして、2枚目の残りの2問を解くように指示を出しました。本児は、1問終わると鉛筆を静かに机の上に置きました。「おわったら静かに鉛筆を置く」ことが終わったことの合図であると約束していたからです。児童は静かに座っています。

教師が、「おわった合図だね。でも、先生は何と言ったかな？」と声を掛けました。すると、本児は、すぐに、「あっ、2問やるのだった。」と指示を思い出し、鉛筆を持ち、問題を解き始めました。

結果としては、2問をやり終えたのでOKではあります。しかし、教師からの声かけがなくても、2問を終わらせることができる方法があったのではないかと考えました。

Aさんは、直前までの方法で新しい指示の後も行動していました。そこで、「集中力にかける、不注意があるなどの特性をもっている子」とわかっていた教師の指示の出し方について振り返りました。

私は、「それまでの内容とは違う指示を出す」というアクションが足りなかつたと思いました。新しい指示内容(変更内容)を伝える前に一言、「新しい指示を出すよ。」「次の指示を出すよ。」という予告があつたら、Aさんは、今までの行動をただ繰り返すだけではなかつたと思います。目的意識をもった指示の聞き方ができたのではないかと思います。

「教師の指示通りに行動できなかつた」というあられから、話が聞けない子、話を聞かない子という評価をされがちな子ども達ですが、ちょっとした配慮や工夫から、「教師の指示通りに行動ができ、話をしっかり聞いている」という評価をもらえるようになるのです。

話を聞いていない子ではなく、話を聞かせることができなかつた自分を反省しました。(後日談。一週間後の指導で、教師も指示の出し方に気をつけましたが、本児も指示の聞き方を前時とは変えていることが伝わってきました。)

